

プログラム解説

今回は二人の作曲家による「第 14 番」の弦楽四重奏曲ですが、じつは同じ年に完成された作品です。どちらも演奏時間が 40 分程になる大作ですが、ベートーヴェンは 7 つある楽章が切れ目なく演奏され、またシューベルトは 4 つの楽章からなります。今回は演奏者のご希望で途中からの入場は出来ませんのでご了承ください。

さて二人の作曲家は 27 歳の年齢差があるのですが、ウィーンで同時代を生きました。この 2 曲が完成した 1826 年は、ベートーヴェンが 56 歳で亡くなる前年、シューベルトが 31 歳で亡くなる 2 年前にあたります。

第 1 部

ベートーヴェン: 弦楽四重奏曲第 14 番 嬰ハ短調 Op131

ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)は生涯、番号つきで 16 曲の弦楽四重奏曲を残していますが、それらは初期・中期・後期の創作期にはっきりと分かれています。後期の 5 曲は、ベートーヴェンの最晩年の 3 年間に書かれました。第九交響曲の成功の後、作曲家はこのこりの情熱のすべてを弦楽四重奏曲に向けました。この第 14 番はこの後期を代表する曲です。

「苦悩から歓喜へ」という大衆に向けてのテーマやソナタ形式から離れ、フーガや変奏曲の形式を多用し、自らの精神世界へ分け入り、創作意欲のまま誰かの為でなく自らに聞かせようという曲を書いていったこの時期。この曲も各楽章がしっかりとした終止をつけるのももどかしく、次々と場面転換(大小さまざまな各楽章が切れ目なく演奏される)していきます。それはハリー・ポッターに出てくる、魔法のたらい(憂いの篩)の奥底に自分の記憶を次々と映し出していくのを観る様でもあります。(約 38 分)

第 1 楽章(約 6 分半)は自由なフーガ形式。第 1 ヴァイオリンが主題を歌い始め、第 2 ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロと順番にこの主題を持って登場します。この主題が、その後そのまま現れたり部分的に現れたり形を逆に変えて現れたりしながら、四つの楽器が独立して、また十分に連携しあって進んでいきます。

ユニゾンで長くのばされた音が消えると、霧が晴れるようにどこからか心地よい風が吹いてくるように**第 2 楽章**(約 3 分)の主題が始まります。ロンド形式のこの楽章は、ワグナーが「優雅な現象が、新たな情景を生命へと目覚めさせていく」と形容しています。

淡い余韻から突如としてフォルテで**第 3 楽章**(約 1 分弱)が始まります。第 1 ヴァイオリンが口上を述べると、回想が始まるとでも言いたげな和音で次の楽章を呼びます。

第 4 楽章(約 13 分)ではチェロのピチカートに乗って、穏やかな幸福感に満ちた主題が示されます。続いて 6 つの変奏とコーダが導かれますが、それは「寒い冬から春を迎えるまでの幸福な家庭の情景」を描いているように私には思えます。ワグナーは「魅力、温和、切望、愛」と形容しています。各楽器のさりげないやりとりが微笑ましい楽章です。ケトルの沸く暖かい部屋でのまどろみを思わせる第 6 変奏のあと、春の日差しの予感のようなコーダが続き、弱いピチカートで消えます。

第 5 楽章(約 5 分半)はチェロの強奏する断片のあと、軽快なスケルツォが始まります。各楽器の素早いやりとりはスリリングで、演奏者にとっての難所と言われています。特にピチカートで音が飛び交う様は必見です。

「あー楽しかった。終わり!」となったあと、ワグナーが「諦念への移行」と形容した**第 6 楽章**(約 2 分弱)のアダージョが孤独感に苛まれるように奏されますが、**第 7 楽章**(約 6 分半)のフォルテで中断され、行進曲風の主題が始まります。ソナタ形式が使われているこの楽章は身を切り刻んでいくような闘いの音楽のようでもあり孤独や悲しみへの開き直りのようにも聴こえます。ワグナーは「苦痛に満ちた断念」と形容しています。そして呆気なく全曲が終わります。



休憩

第 2 部

シューベルト: 弦楽四重奏曲第 14 番ニ短調 D.810《死と乙女》

フランツ・シューベルト(1797-1828)の残したとされる15曲の弦楽四重奏曲のうち、この第14番《死と乙女》は最も有名であると同時に、極めて厳しい内容を抱えた永遠の名作と呼んでよい作品ではないでしょうか。

《死と乙女》という表題は、第2楽章の主題に自作の同名の歌曲の旋律が引用されていることによります。歌曲《死と乙女》は1817年(作曲家20歳)クラウディアの詩に作曲されました。シューベルトはピアノ五重奏曲《ます》のように、歌曲から器楽曲へ旋律を転用している例が多く見られ、このことは器楽曲の作曲においても歌の旋律がシューベルトの発想の源になっていたことを示すものと言えるでしょう。

シューベルトがこの弦楽四重奏曲の作曲に着手したのは1824年の春のことでしたが、驚く程の速筆であった彼としては例外的に完成まで2年の歳月を費やしています。それは彼の敬愛するベートーヴェンのような緻密な構成を目指し推敲を重ねた為かもしれませんし、自身の健康状態が悪化していた為かもしれません。それゆえか、全楽章が短調で書かれたこの曲は、書式としては極めて厳格に古典主義が貫かれており、ただならぬ緊迫感と焦燥、そして限りない憧れがシューベルト特有の美しいメロディを交えながら展開されます。(約40分)

第 1 楽章 アレグロ

簡潔ながら先輩ベートーヴェンにならったかのような力強い第1主題に始まります。まるで作曲者が迫り来る死の恐怖と懸命に戦っているような、闘争心と絶望感がないまぜになった渾身の主題。対して第2主題は柔和で優雅なウィーン情緒を漂わせながら、和声処理のためか不安さも垣間見えます。コーダはひっそりと、息絶えるように終わります。

第 2 楽章 アンダンテ・コン・モート

《死と乙女》の主題と5つの変奏、コーダからなる緩徐楽章。死の予感に苛なまれながらも、夢のように美しいものへの憧憬がコーダへと向けて昇華されていきます。

第 3 楽章 スケルツォ(アレグロ・モルト) & トリオ

悲壮感と激しさを持ったスケルツォ。極めて厳しい音楽で、切分音が効果的に用いられています。トリオではなだらかな旋律が歌われます。短いながら印象的な楽章。

第 4 楽章 プレスト

フィナーレは作曲者自身たびたび用いたタランテラ舞曲のリズムが全曲を支配します。まるで死を催促する死神に追い詰められるような疾走するロンド。どこへ連れていかれるのだろうかというリズムの奔流のすえ、コーダでは一瞬明るい曲調になったかと思いきや、結局すぐに暗いニ短調に戻り、さらにテンポを速めて駆け抜けるように終わります。

